

会議名	“第4回放牧サミット” 開催テーマ 「水田・里山放牧による新たな土地利用・家畜生産方式の推進のために」
開催日時	平成16年9月29日(水)～30日
開催場所	福島県郡山市および栃木県那須町
主催者	(社)日本草地畜産種子協会、(独)畜産草地研究所
参加人数(概数)	255名
1. 会議の概要 (500～1,000字程度または議事内容の資料添付)	<p><b>現地検討会</b></p> <p>バス5台に分乗しての盛大なものであった。農家概要等については、別添参考資料の54～71頁に詳しく記載されているとおりのもので関係指導者から翌日に事例発表があり、パネルディスカッションには農家も出席していた。</p> <p><b>基調講演《特別講演》</b></p> <p>「日本型放牧の今日的意義：食文化から環境問題まで」(生源寺 眞一 氏)</p> <p>部会長を務める食料・農業・農村政策審議会企画部会の中間論点整理からの引用を交え、次のような話題提供があった。</p> <p>農耕景観と食文化について、ヨーロッパと日本の違いと現状の日本の不自然さの指摘。農業技術と日本型放牧の位置づけ。条件不利地域(中山間地域)と国土の有効利用。国民(消費者)の共感を得るために、社会と共に歩むべき日本型放牧。</p> <p>質疑の中で、日本の畜産物消費水準は適正範囲にあると考える。畜産関係者は畜産物の自給力と供給力を見極めて、エサで輸入するのか畜産物で輸入するのかの議論も覚悟すべきである。と開陳された。</p> <p><b>基調講演</b></p> <p>(1)「和牛放牧のきた道これからの道—和牛の道は草木を食べ歩くカー—」 (上田 孝道 氏)</p> <p>演者は10年前まで高知県に勤めた研究者で、その後も和牛放牧についてのコンサルタント活動をしている。「わが国の砂漠化しない国土は無限の資源である」との観点に立ち、豊富な写真と達者なイラストを駆使して、大和時代から現在までの和牛の歴史について、「牛がきた道」を振り返りながら「もう一つの道」として和牛放牧と環境保全の関りを整理・再評価し、「これからの道」として放牧畜産のあり方について豊富な経験からの問題点の指摘があった。</p> <p>(2)「小規模移動放牧を全国各地に広めるための技術的課題—耕作放棄地・水田・里山の放牧利用—」(小山 信明 氏)</p> <p>畜草研の山地畜産部長であり、小規模移動和牛放牧技術に関する最近の試験研究成果の紹介と開発すべき技術的課題について紹介されたが、特に評価すべき目新しいものではなかった。</p>

## 事例発表

### (1) 「草原を利用した肉牛生産」(川村 千里 さん)

三瓶牧野利用について、家族経営による多彩な川村牧場の経営実績、BSE騒動後の学校牛肉給食再開の経緯、放牧技術等について思いを込めて経験談を熱心に語った。

### (2) 「福島県における遊休桑園等の放牧利用」(佐藤 茂次 氏)

福島県畜試が行った、遊休桑園および耕作放棄水田の放牧利用、天水利用による放牧水源の確保、放牧産子牛の育成・産肉利用についての実証試験成績と、安達普及所管内の遊休桑園放牧利用促進の普及活動について紹介された。特に、場産の放牧産・育成子牛をセリ市場購入の非放牧牛と比較肥育して、両者同等の肥育成績であることを実証した成果は評価できる。

### (3) 「那須における水田・里山放牧の普及」(相馬 光美 氏)

前日現地検討を行った水田耕作放棄地における繁殖牛放牧の普及活動が紹介された。

### (4) 「“谷ごと放牧” から “おおいた型放牧への” 展開」(金丸 英伸 氏)

大分県における肉牛放牧の状況、谷ごと放牧の概要、大分県における放牧の推進と課題について紹介された。

## パネルディスカッション；「水田・里山・耕作放棄地放牧普及のための課題」

畜草研の落合飼料資源研究官の司会によりパネラーとして全講演者、現地見学農家、原田室長、増田淳子さん（消費ジャーナリスト）を壇上に並べた。主要な論点と発言は次のとおり。

#### (1) 国土利用について

・この件について行政サイドのムードがよく、農地（水田）の放牧利用については何とかなるが、林地の利用については利用権設定、法制度での難点がある。入会権についても不在権利者の問題もある。

・東京に在住する消費者として、耕作放棄地の実情を見て大きなショックを受けた。

・林地と山の放牧利用について審議会の企画部会で議論されたことは無いが、個人的には縦割り行政の問題もあるが土地利用の主体は市町村と考える。

・三瓶山で草原放牧が先行しているのは、市長が主導しているから。

#### (2) 牛の傾斜地利用

・牛は傾斜地の放牧を好んでいるのではなく、平らな基地が必要。助成等で優先させると平地から不満が出る。

・平地での放牧は勿体ない。耕作放棄地は戻すことも考えなければならない。

・放牧は牛だけでない。ヤギも居れば、綿羊も居る。

#### (3) 放牧牛の肉質

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・放牧が拡がらないのは、サシに偏重した牛肉の格付け基準が元凶と考えるが如何。</li> <li>・それを求める市場、取引が実態としてある。現状の取引の中でも放牧牛が評価されており、実証試験例もあり、将来の方向性は見えた。</li> <li>・放牧したからサシが入らないわけではない。D I Kにより、選抜マーカ―が来年には見付かる。</li> <li>・現在の子牛で儲かり、経営が安定している。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・サシは消費者の好みであるが、格付け 2, 3 も美味しく、消費の幅を広げる努力も必要。</li> </ul> </li> </ul>		
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	3. その他の発表課題で関心のあったもの	4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	特になし
報告者	針生 程吉		